発　　松元雅子

福島から転入してきた女生徒と対話する教師の歌。初めての土地、学校、教師に、なかなか心を開かない生徒が、少しずつ心を開き、口を開きはじめた様子を表現した上句、的確。

スーパーのレジ打ちしひと別人として夕闇の自転車に乗る　　高山邦男

職場とは別人、別人格の人となって帰っていったというのである。帽子をとったり、ユニホームをぬいだりすると、まったく別人になってしまう人がいる。下句に「自転車」という具体物を出して成功した。

いたく痩せ赤きセーター着て笑まふ、失恋するにも体力が要る　　梅原ひろみ

失恋の歌として独特。脱皮を果たしたように、大仕事を終えたように、たんたんとうたう事後感がじつに何とも言えず、独特である。

足柄の茶畑に降るセシウムの甘美な響き青の意といふ　　大橋伸宏

静岡県産の日本茶からセシウムが検出されたという報道に取材。「甘美な響き」が、雨の響きと言葉の響きの二つを重ね、五感の外で降りつづくセシウムの存在を浮かび上がらせる。「セシウム」の語源は「青・青空」を意味するラテン語だという。

セシウムはひつそりと降りぬぼたまの月に濡れたる黒炭（すみ）の切り口　　金美苑

セシウムの存在は、人間の五感では関知できない。そんな五感の外でセシウムが降る不安をうたう。「月に濡れたる黒炭（すみ）の切り口」は、液体を吸い込むようにとめどなく月光を吸い込むイメージで、人間を含めたあらゆる地球上の生物に、セシウムがしみこんでゆくイメージだろう、と読んだ。

ひらきては黒き瞳をまた閉ぢぬ鵜にもあるか放心のとき　　水本光

ツグミは小鳥の中ではやや大きい方だが、それでも目は小さい。その小さな瞳をクローズアップして、不思議な世界を描きだした。

張られたる円型のみづ　柿の枝（え）のあはひの夏のあをぞら映す　　田中薫

円型の水に映る青空。当然、枝も映っているのだろうが、枝はうたわずに空だけに絞って表現した手腕。

単独の来客減りて複数で訪ねらるるが多くなりたり　　黒岩剛仁

会社の地位が上がると、扱う仕事の規模が大きくなり、したがって交渉・折衝する相手方も慎重を期して二人三人となってくる。立場の変化が人間関係を変える現場を具体的にうたって、注目した。